



台湾ランニング事情 第4回 台北国道マラソン

石原忠浩（台湾・政治大学国際関係センター助理研究員、助理教授）

台湾の冬は短い。3月に入ると早くも初夏という感じであり日中は25度を越えることもしばしばある。以前4月中旬に開催された新北市のフルマラソンに参加したが、後半は暑さで脱水症状に陥った経験から、「台湾で4月のフルマラソンは絶対に走らない」と決めており、以後毎年3月中旬に開催される「台北国道マラソン」をシーズン最後のフルマラソンとして参加している。台湾ランニング事情第4回は、高速道路を走る台北国道マラソンの概要、経験談を紹介する。

1. 台北国道マラソンの歴史沿革

1996年以降、毎年3月に開催される「台北国道マラソン」は、複雑な経緯を経て今日に至っている。1986年に始まった「台北国際マラソン」が地下鉄工事のため1990年以降中断される一方、右大会の正常な運営を望む関係者による努力の結果、1992年から台北におけるロードレースを工事等の影響を比較的受けない国道（高速道路）に場所を移して開催されることとなり、このレースが「台北国道マラソン」の原型となったようである。

1992年に開催されたレースは、現在実施されているところとは別の区間である「北二高」（俗称「北部第二高速道路」、正式名称は国道3号線）の旧台北県樹林から桃園県龍潭区間を利用して開催された。その後、2年の中断を経た後、1995年に高雄で日本の国体に相当する大会が実施されることに合わせ、当地でハーフマラソンが開催された。翌1996年、政府関係者は国道1号線（中山高速公路）の汐止-五股区間の交通状況を評価し、交通部、台北市の協力を得て同年11月に正式に「台北国道マラソン」が開始されることとなった。

1996年以降同大会は、1999年に921大地震の影響で中止になったことを除けば、毎年開催され、2002年からは地下鉄工事が一段落したことで、

「台北マラソン」が再開されたことで、同年以降は毎年3月に「台北国道マラソン」、12月に「台北マラソン」が開催するという形で現在に至っている。

同大会の名称は、2004-6年は「台湾ナイキ」、2007-10年は「カルフル」が主要スポンサーとなり、「ナイキ国道マラソン」、「カルフル国道マラソン」と称されたが、2011年以降は特定の企業名はつかず「台北国道マラソン」となっている。

表1は、中華民国ロードレース協会のウェブサイトを確認できる2009年以降のフルマラソンの完走人数と男女の優勝タイムである。男子の最高記録は2時間16分台、女子が38分台と「台北マラソン」に比べると見劣りがする。海外招待選手の無かった2009年以外は、男女とも外国選手が優勝したが、2014年は賛助企業の減少によりエリート選手を呼べなかったこともあり、男子は自費参加のケニア人選手が4連覇を果たし、女子は5年ぶりに台湾人選手が優勝した。

表2は上位入賞者の賞金一覧であるが、「台北マラソン」が、大会新記録による優勝者の最高200万元と比べると今レースの金額は「控えめ」であり、2時間10分を切る選手が参加しないのも仕方が無いのかもしれない。

表1 台北国道マラソン完走人数と優勝タイム

開催年	完走人数	男子優勝タイム	女子優勝タイム
2009	1050	2時間 20分 14秒	3時間 18分 57秒
2010	1278	2時間 24分 7秒	2時間 53分 6秒
2011	1196	2時間 18分 15秒	2時間 44分 9秒
2012	1197	2時間 16分 17秒	2時間 38分 56秒
2013	1399	2時間 20分 2秒	2時間 42分 6秒
2014	1433	2時間 24分 0秒	3時間 6分 55秒

表2 台北国道マラソン入賞者の賞金額（男子は10位、女子は5位まで）

	男子	女子
1位	10万円	8万円
2位	5万円	5万円
3位	3万円	3万円
4位	1万円	1万円
5位	8千元	8千元

2. 台北国道マラソンの概要

2013、14年3月に開催された「台北国道マラソン」は、大会パンフレットによるとフルマラソン、ハーフマラソン、10Kの3種類があり、参加人数はそれぞれ2千、4千、6千の総勢1万2千人規模の大会となっている。コースは、図1が示すように台北市の西から台北市と新北市の境の約10キロ区間をハーフは1往復、フルは2往復する。10Kのコースは、台北市から新北市の西方向5Kを往復する。

台湾でも一部のロードレースでは、「秒殺」と形容され瞬時にして申し込みがいっぱいになるレースもあるが、本レースに関しては、今年度も「多少余裕があり」、フルに関しては、申し込み開始から3日間は余裕があった。

制限時間は、ハーフ、10Kは、ずいぶんと緩いが、フルマラソンの5時間半は、時には25度近くまで上がる気候と単調なコースを考えれば、東京マラソンのように「抽選に当たったから、一生に一度の思い出！」という動機で応募する参加者よりも、真面目に記録目的で参加する競技者が多い

かもしれない。(表3)

参加経験者からは、「高速道路の単調な往復、景色もすぐに飽きる、アスファルトの照り返しが強く、応援市民も皆無であり、止めた方がいい」と警告されたが、ある意味この指摘は今マラソンの特徴を体現している。高速道路のため、スタート地点に数名の動員されたチアガールがいたほかは、エイドステーションで働くボランティアや大会関係者だけである。路上で「加油」の声援が無いのは寂しい。



図1 台北国道マラソンのコース

表3 レース種目、参加費、制限時間

種目	42.195K	21.0975K	10K
参加費用	900 元	700 元	500 元
制限時間	5 時間 30 分	4 時間	1 時間 30 分
上限人数	2000 人	4000 人	6000 人
スタート時刻	0600	0600	0700

3. レース結果と雑感

(1) 2013 年のレース

主催者発表の資料では、2013 年のレース参加者は 1 万 2274 人。レースは招待選手のケニア勢が男女とも優勝、3 連覇となった男子優勝の JOEL KIPLIMO KEMBOI は昨年より 4 分遅かった 20 分台の記録に対し「独走だったので連覇を目標にした」とのコメントがあり、女子は前年 2 位だった MERCY JELIMO TOO が 42 分台で制した。それ以上に、筆者の興味を引いたのは写真入りで報道された「国内組 1 位」の選手であった。

トラックの 5 千、1 万 M を専門とする体育大学生の汪聖亜は初マラソンながら 2 時間 38 分 58 秒で走り、台湾人 1 位、全体 4 位の好成績であったが、ゴール後関係者に対し「私は代跑（身代わり参加）です」と告白した。汪によると今レースは、負傷した先輩に代わり、エントリーしそこなった自分が代走することになったと説明した。関係者の話では、台湾のロードレースで「代走」参加は日常茶飯事であるが、上位入賞者というのは前例がないと指摘した。関係者は大会規定により汪の記録は無効とし、賞金 1 万元も授与されず、汪と代走を依頼した先輩は双方ともロードレース協会が主催する試合に 1 年間出場禁止になると説明した。汪本人は右処分を受け入れるとともに、今レースでは予想以上の走りが出来たので将来はマラソンを視野に練習を積みたいとのコメントを残した。将来、同人が快走する勇姿を見れるかもしれない。

筆者本人のレースであるが、3ヶ月前の台北マ

ラソンで 4 時間 14 分まで記録を縮めたことで、今マラソンは 4 時間切のサブフォーを目標に 1-2 月と練習を積んだが、レース直前に 2 泊 3 日で中国への会議出張となり、抑えたつもりでも食生活は油辛料理、白酒等飲食過多になり、胃腸に不調を抱え、レース前日は、香港経由で 6 時間のフライトで帰宅したのは午前様の睡眠 3 時間の強行スケジュールでレースに挑むことになった。

6 時スタート時の気温は 18 度と快適であったが、雲の無い青空に後半の暑さが憂慮された。号砲からタイム計測地点への通過は 3 分ほどかかったが、走り出せば「台北マラソン」のような大混雑はなく、最初の 1 キロから 5 分台で容易にレースに入ることができた。コースは 2 キロまで「緩い登り」、次の 4 キロまでは「緩い下り」、その後も微妙なアップダウンを感じるがひたすら単調なルートを走る。しかし、圓山飯店、松山空港を見下ろし、航空機の離着陸の見物や高層建築現場からの応援は悪くなかった。



2013 年レースのスタート地点

表4 2013、2014年完走者人数一覧

種目	完走男子		完走女子		総計	
	2013年	2014年	2013年	2014年	2013年	2014年
42K	1327(94.9%)	1351(94.3%)	72(5.1%)	82(5.7%)	1399	1433
21K	3103(87.6%)	2983(80.9%)	440(12.4%)	702(19.1%)	3543	3685
10K	2938(70.2%)	2656(62.1%)	1250(29.8%)	1621(37.9%)	4188	4277

前半は快調に走り、18キロ地点では、4時間のペースメーカーも抜き去り、中間点通過時は、1時間55分台と想定通りの展開に並走する同年代ランナーに「4時間、行けそうかな？」など話しかける余裕があったが、好事魔多し。23キロ過ぎから左ひざに刺すような痛みがでてくる。アキレス腱はテーピングを施していたが、膝対策を怠ったことを後悔。また20-30キロは日差しが強く、サングラスの必要性を実感させられた。その間、1キロ6分半にペースダウンを余儀なくされ、「気分転換」に26キロ地点で簡易トイレに駆け込み、その際に目標を訂正し「いけるところまで行く」と開き直り、30キロまで我慢していると、痛みは和らぎ、棄権という最悪の事態を避けられる見通しが立ったことで、4時間10分以内の目標に切り替えた。38-40キロの緩い登りは辛く、気温の上昇もあり、軽い脱水症状を起こすが、どうか4時間7分台の自己ベストでゴールできた。ゴール時の10時に気温は24.7度まで上昇していた。4時間切の目標は持ち越しになったが、体調不完全、レース中の膝痛への対処など貴重な経験を積むことが出来た中での自己ベストは前向きに捉えたい。

(2) 2014年のレース

約1万1千人が参加した2014年のレースは、招待選手が無かったことからここ数年では最も低調な記録に終わった。男子はKEMBOIが2時間24分台ながら4連覇を達成。女子は、5年ぶりに台湾選手の簡培宇が3時間6分台の記録で制した。



2014年レースのスタート地点

4連覇を果たしたKEMBOIは、2週間前に新北市で開催された萬金石マラソンに出場したが、25キロで棄権しており、今レースで雪辱を果たした。同人はケニアで、とうもろこし栽培に従事する農民であるが、数年前から海外の賞金レースに参戦するようになり、同マラソンの4連覇で獲得した賞金、出場費は彼にとって生涯最大の収入であり、今回の勝利で故郷で更に農地を購入できるとインタビューで答えていた。

2回目の参加となった筆者は、昨年同様3時40分起床、4時40分出発、5時前には現地着。スタート時の16度は昨年より2度低かった。2013年12月の台北マラソンで当初の目標であったサブフォーを達成したこともあり、今レースでは3時間45分を目標に掲げたが、気分的に余裕をもって挑むことができた。

今レースは、ランニング仲間二人を誘い、「1キロ5分半ペースで35Kまで」と事前に約束し、序盤から概ねペースを守ることができた。25 -



レースの様子

28Kで太陽が顔を出したが、昨年ほどの陽射しの強さが無かったのは幸いであった。トイレに駆け込むこともなく最後の給水地点の39K地点まで、友人らと並走することができ孤独とは無縁のレースを楽しめた。昨年12月のレースと同様、最後の1キロに最速ラップを記録し、目標には届かなかったが、自己ベストを3分更新する3時間48分台でゴールできた。

2013-14年のレースを完走者の男女比率から感じるのは、女性ランナーの増加である。(表4)日本では東京マラソンの開催後、女性ランナーがこ

のプロセスで大きな役割を担い、ファッションなどの面で流行を先取りしてきた感じがある。完走女子率は、フルは微増であったが、ハーフで19%台、10Kに至っては38%とそれぞれ前年比で6-8%増加している。最近では女子限定の大規模なロードレース大会が開催され、「運動はお洒落」「ランニングは健康で格好いい」というイメージが浸透してきたことの反映かもしれない。台湾のロードレースも次第に華やかな雰囲気になっていくことに期待したい。



2014年レースの様子